
消したい過去はありませんか？ 捨てたい過去はありませんか？ ？

hidane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消したい過去はありませんか？ 捨てたい過去はありませんか？

【Nコード】

N8445N

【作者名】

hidane

【あらすじ】

とある公園にボロい野良犬がいました。野良犬なのに首輪がありました。

ボロ犬にとって、首輪はとても大切な記憶のしるしでした。けれど、思い出すとずいぶん切ない気持ちになるのです。

そこに、がらくたがいっぱい詰まったダンボールを抱えた少女が現れました。

「消したい過去はありませんか？ 捨てたい過去はありませんか？」

(前書き)

むかしむかしあるところに、
ハアハア

ワンコカワイイヨ

男の子同士が絡み合う本の即売会で、
ヨハアハア

ワンコプリケツダ

ダンボールを持ったおねーさんが
ヨハアハア

ワンコモフモフダ

『消したい過去はありませんかー、
捨てたい過去はありませんかー』

ワンコアゴニクガノビル

と叫んでいたそうです。
ネエハアハア

ダンボールには「萌えないゴミ」と書いてあったそうです。

ワンコハアハア

……各文の後ろにあるノイズは気にしないでください。

とにかくワンコというのは人をうたがうことを知らない生き物です。

だから、決して、裏切らないでください。

消したい過去はありませんか？ 捨てたい過去はありませんか？

「消したい過去はありませんかー、
捨てたい過去はありませんかー」

幼い声が公園に響く。

汚れた服に靴下裸足。ぼろぼろの格好をした子供がこれまたぼろぼろの段ボール箱を抱えて歩いていた。

「捨てたい過去はありませんかー、
消したい過去は……」

何度目かのその台詞を言い終わる前に、電線から黒い影が子供の頭を直撃した。

「いたっ！」

「この馬鹿が！ こんなところに客がいるか馬鹿！」
羽ばたきつつ空中に静止して、黒い鳥が怒鳴った。

「ひどいよ、鴉さん」

「馬鹿に活を入れたまでだ馬鹿。こんな所で客寄せする馬鹿がいるか」

鴉は鉄棒に止まり、くちばしで子供の目を抉らんばかりにぐいと顔を近づけた。

「こんな平和な住宅地の真ん中によお、
首括りそうなくらいの借金、なかったことにしたい奴がいるか？
強請り強盗あらゆる前科、なかったことにしたい奴がいるか？
風俗にいて、ガキ堕ろしたのなかったことにしたい奴がいるか？
身ぐるみ剥いで、殺して埋めたのなかったことにしたい奴がいるか？

そういう奴引くにや、せめてもつと人間がいるとこに……」

「でもお」

子供は頭を抑えながら口を尖らせた。

「こないだねえ、鴉さんにおしえてもらった、人間のいっぱいいるところでやってたら、紺色の服きたぼうしのおじさんにつれてかれたのー」

「はあ？」

「それでねえ、おかあさんはとかおとうさんはとかきかれて、早くおうちに帰りなさいっていわれたのー」

「……ああ、警官か……」

鴉は首を落とし、翼で顔を覆った。

「ったくよー、やりにくくなったもんだなこの国も。ろくに商売もできやしねえ」

「あ、でもねえ、おうちないっていったらねえ、川原のおじさんたちがやさしくしてくれたの」

「……お前の持つてる箱に親近感でも感じたんじゃないの？」

「しんきんかん？ なあにそれ」

子供は首をかしげた。

鴉はため息をついた。

「とにかく、お前こんなところじゃ食ってけないだろ、どうする気だ」

「だいじょうぶ、ここにもお客さんはいるもの」

「どこにだ」

懐疑的な視線を向ける鴉に、子供はくすりと笑う。

「あのね、お客さんはね、人間だけじゃないのよ」

そう言って、子供はこちらを見た。

「――ほら、そこにいる」

……気づかれていた。

私は影から彼らを覗き見ることを諦め、沈丁花の植え込みから顔を出した。

長い毛に枝が引っかかり、抜けて毛の塊を残した。

「どうしたの、ワンちゃん。すごく汚れてるよ」

この子供に、汚れていると言われてはお終いだ。

昔なら、たっぷりの湯と石鹸で洗ってもらえたのだが……。

そうだ。そのことだ。

「なあに？」

過去を捨ててくれるのだろう。

私は、昔人間に飼われていたことがあるのだが、その過去を捨ててくれないだろうか。

「人間に飼われていたところが、嫌だったの？」

いいや。

あの時ほど良い時は無かった。

定期的に風呂に入れてもらえたし、朝晩と美味しい食事ができたし、散歩もできたし、何より可愛がってもらえた。

「ふうん……」

子供は、首をかしげた。

「ワンちゃんは、めずらしいお客さんなのね」

何故？

「だいたいのお客さんは、いやな過去を消したり捨てたくてくるの。楽しかったことを失くしたいお客さんは、あんまりいないよ」なるほど。

しかしだね。良いことを知ってしまっているからこそ、辛さを感じるということもあるのだよ。

人間の生活を知っているから、欲が出る。食べるにはそれほど事欠かないのに、もっと美味しいものが食べたい、体を綺麗にしたいと際限なく膨れ上がる。

昔の幸せな記憶が、かえって今を不幸にしているのだ。

だが、どうせあのころには戻れない。なら、せめて今の状態が普通なのだと思って暮らしていきたい――。

そう言うと、子供はうなずいた。

「わかった。じゃあね、お代はその首輪ね」

首輪？

この首輪は、見た目こそ金に光って見えるが、安い銀色の金属に黄色い塗料を乗せただけの代物だぞ。

子供は首を振った。

「お金じゃないよ。お金なんて食べられないもの」

それは食えるまい。私も食えない。

「わたしたちが喰べるのは、それに籠った情念だから情念？」

「そう」

どういう意味だ。

「いまワンちゃんは昔のことをすごく強くおもってるでしょう」

ああ。

「でも過去を失くしたらそのおもいは無くなるでしょう」
だろうな。

「その分の力を、わたしは喰べるの——」

子供の目が、不思議な光を湛えた。

ふう、と体が宙に浮いた。

首の後ろで、ぶつり、という音が聞こえ、金の光が箱の中に吸い込まれるのが見えた。

気が付くと、薄汚れた箱の傍らに横たわっていた。

十七、八の娘がその薄汚れた箱を抱え、こちらを見て、ご馳走様、と一言言って鴉とともに去っていった。

何のことだか、さっぱりわからぬ。

辺りを見渡せば、住処としてある場所から大分離れていた。

急いで縄張りへ向かって駆けた。植え込みを通ると毛が抜け枯葉が絡んだが、それはいつものことだった。

首の周りが、軽いような、涼しいような、妙な感覚だけが残っていた。

(後書き)

読んで下さってありがとうございました。

未熟な文章書きなので、批判していただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8445n/>

消したい過去はありませんか？ 捨てたい過去はありませんか？ ？

2010年10月28日03時40分発行